

心病

外国語学部
英語英文学科2年

藤間 渚

不治の病。古くは結核から、エイズ、パーキンソン病などが、そのように呼ばれた歴史がある。医学が順調に進歩し、様々な難病に対する特効薬が開発され続ける現代でも、やはりその言葉が消えることはない。恐ろしいのは、これらの病は遠い海外の伝説なんかじゃないことだ。これらは今も、気を抜けばあなたの隣で起こりうる。自分だけは大丈夫なんて、本当に言い切れることは出来るだろうか。

全てを癒す、全能の薬はどこに。

十数年前、長年アメリカ某所で怪失踪事件の調査を進めていた私立科学研究所により、一つの病気が発見され、公表に至った。『モノケイン・シンдрーム』、現代医学では対抗の出来ない、いわゆる『不治の病』の一種である。その存在はまるで、神の手が介しているかのように不自然で不可解なものであった。原因とされるウイルスは新種。突発変異であると解析を進められたが、どのような

他種とも特性が重ならず、長らく彼らを悩ませる事となる。恐ろしいことに調査結果を総合すると、このウイルスは現地球環境では極地でもない限り、たいていの環境では生息を許されていた。その中でも、消費社会の中核である都市部に關しては、ウイルスたちの繁殖に最適とされる見解もあった。しかし、その感染経路は未だ不明瞭である。皮肉にもハッキリと判明しているのは、感染者の特異な症状と、とある共通点のみであった。このウイルスに感染した者は『特定の条件下』で、まるで存在すらしなかったかのように跡形もなく消失するのだ。一説には「感染者の周囲も含めた『存在』が人間の知覚能力の範囲からずれ、誰からも認識されなくなる」とも考えられているが、症状の特性上、感染し症状を発している状態のサンプルは入手が極めて困難であり、未だメカニズムは正確に判明していない。

そして共通点、これが『特定の条件』に深く関わってくる。前述の研究者たちは、民間の依頼により

怪失踪者の搜索に協力をしていた。その過程で、失踪者の素性の捜査や、過去に類似した状況での失踪を遂げた経歴のある人物と接触を繰り返すうちに、とある共通点が見受けられた。

「限りなく寂しいと、極めて孤独であるという感情を心に抱くこと。あまり現実的に映らないでしようが、これこそが発症のトリガーであると、我々は公言を致します」

以下、会見中に出された多数の中の一例、その要約である。

とある街に、レインと呼ばれる少女がいた。彼女はごく普通の家庭で暮らしていたが、その家庭環境は満たされていると言えるほどの水準ではなかった。そして娘が小学校に入学する頃、遂に夫婦間の熱も冷めきってしまった。夫は日を追うごとに帰りが遅くなり、家族で集まる機会も、会話も、笑顔も、時間と共に減っていく。そんな毎日が過ぎ去った。

事件が起きたのは、冬に入る頃の、とある晩のことであった。

時刻は午前一時を過ぎたころ、ついに溜まっていた鬱憤が爆発しリビングで口論を繰り広げる両親のもとに、レインが顔を出したのだ。ただならぬ気配と物音で、目を覚ましたのだろう。当然、室内の空気がジリリと冷やつく。苛立った両親は怒声と共に、レインに部屋に戻るように命じた。しかし、レインは何も言わずに、ただ両親の瞳を見つめるのみであった。その数十秒、冷めた目をした娘と見つめ合うほんの数十秒は、興奮状態にあった母親にヒステリーを起こさせるには、十分すぎる時間であった。頬を叩く音が、部屋の隅々まで行き渡る。

また数秒の時間を要した後、両親は自分たちが犯してしまった罪の重さと、不可解な事実に気付かされた。目の前にいたはずのレインが、前触れもなく忽然と姿を消してしまったのだ。

レインの捜索は、数日間に渡って続けられた。地元警察により捜査網も張られ、何度も現場の検証が行われた。それでも、不可解なほどに彼女に関する手掛かりは、日常生活の不満ばかりを綴った日記以外、何ひとつ発見されることはなかった。

残された両親は、ひたすら懺悔を繰り返した。何度か二人で教会に足を運んでは、神々に祈りと後悔を告げる。娘の失踪に比べれば、なんと些細な問題

で喧嘩をしていたのか。娘の気持ちも気付けずに愚かであった、と。

そのような生活が続いた、ある朝。レインの生存は絶望的かと思われ憔悴しきった夫婦の前に、突然レインは何事もなく戻ってきた。とても晴れやかな表情とともに。

「愛してくれたから」

これは事件後、数年経ったレインが、調査の協力の際に語った事である。

「パパとママがちゃんと仲直りして、私を大切に誓ってくれたから。大切にされていたと気付けたから、私は戻って来られたの。それまでずっと、二人の後ろで見つめていたよ」

このような事例は、他にも数十件近く例示された。奇妙なことに、その全てが類似して、「同じウィルスに感染した人間」が、「精神的に大きく傷を負った状態」で、「似たような突発的失踪」を遂げていた。そして全員、「近くにずっといた」と証言をしたのだった。

以降も数時間に及ぶ会見にて、科学者たちの小難しい理論や解説が述べられ続けた。しかし、そのように本来広まるべきであった詳細は、すぐに世間の記憶から抜け落ちてしまう事となる。

なにせ、最後に研究所長が放った一言、これが衝

撃的過ぎたのだ。

しばらくTVで見ない日は無く、私もかなり鮮明に覚えている。

『「愛」なのです。この難病には、確かに『愛の力』こそが、特効薬なのです』

堅苦しそうな研究者が言うには、世間的には不釣り合いに映ってしまったのだ。

現象は『蒸発』と呼ばれ、日本では『ケイン症』の略称で浸透することとなった。『愛の力が特効薬』の件もあり、メディアは大々的に取り上げた。そのためか、半月もする頃には『蒸発』と思わしき通報が、全国的に見られるようになっていたそう。

そして数年後、今から数えて五年前。対策に追われた政府は、とある奇策を講じた。

『未成年者共同生活政策』、学生たちは略して『共同』と呼んでいた。

当時、各地から寄せられた情報を集計した結果、発症者の多くは十代の青少年であると判明していたのだ。これは、そんなデータを元に、初めて政府が打ち出した政策である。諷い文句は、「もう寂しい思いをさせない」だったはずだ。これについては、たぶん私の友人について話した方が良さそうだ。

Sは、中学時代のクラスメイトであった。私とは

違い、朗らかで明るい性格をしていて、いつも誰かと話しているような子であった。事実、私もよく昼食と一緒に食べたり、放課後には何度もカラオケやショッピングに誘われた記憶もある。孤独なんか感じたことも、必要もない。そんな印象の子であった。そんな彼女は、ある夏を境に『蒸発』した。原因、とするのも少し違う気がするが、やはりその陰には『共同』の存在も影響していたのだろう。

これは彼女が見えなくなってからSの幼馴染に聞いた話で、うわさの類ではあるが、彼女の家庭環境もまた『満たされない』ものであったそうだ。本当の母親は幼いころに他界、それでも父親と一人で、どうにかやってきていた彼女。そんな均衡が壊され始めたのは、話の感じからすると私たちが進級する頃だろう。父親が、新しい彼女を見つけたのだ。それからというもの、学校でこそ明るく振舞っていたSであるが、家庭は散々であったようだ。母親を名乗る知らない女性と、自分を邪魔そうに扱う父親。そんな三人暮らしを、いわば強いられたいらしい。帰る場所であるはずの家のなかに、ずっと肩身が狭い。その苦しさは、きつと想像以上のものだろう。

悔しいもので、記憶を辿ると、彼女の様子には思っていた節がいくつか見当たった。Sは二年生に上がってからというもの、夜中まで帰らないで遊びまわる頻度が、明らかに増えていた。それこそ、あま

り放課後は遊びたがらない私でさえ、無理を言って連れまわすほどに。普段から真面目な彼女にしては珍しいと思っていたが。そうか、あれは家に帰りたくない気持ちの表れだったのか。私はその時になって、ようやく気付かされた。——胸のあたりが、すうっと冷たくなる感じがした。

例の政策が動き出したのは、ちょうど二年次の夏季休業に入るころであった。全国のモノケイン疑惑がある青少年少女に、国が安定した環境を提供することと発症を未然に防ぐ新制度。そのテスト運営の希望者が正式に募集されたのが、この夏であった。Sは参加者の一人として同行していたそうだ。そうして、誰にも別れを告げぬまま姿を消した。

結論から言うと、この政策は、成功と呼べる代物ではなかった。前提として、思春期の人間の大半は、自分が得体のしれない病気を持っていること、そう思われることを、どうしても避けたがる。自分だけが仲間外れになるのは、怖いから。結果、参加者の集まらないこのイベントは、あまりにも悲しい用途で利用されることとなる。

これもいつか聞いた話であるが、残されたSの日記には、彼女の悲しみが書き殴られていたそうだ。『追い出されたんだ』『もう家に、私は必要ない』『私の居場所は、この世界には』そう、震えた文字で。

高校生になった今でも、彼女の家を通りがかるたびに、朗らかに笑うSの姿が脳裏をよぎる。この前、見覚えのある夫婦が、見覚えのない子供とSの家に入って行くのを目撃してしまった。その幸せそうな表情に気が付いたとき、見てはいけない物を見た気がして、自然と近くの河原まで逃げるように駆けだしていた。

——S、君はまだ、あの人達の近くを彷徨っているのでしょうか。もしそうならば、なんと無慈悲な世界でしょうか。いつか君のもとにも『特効薬』が届くことを、心の何処かで祈っています。

——どこまでも、厄介な病を抱えてしまったものですね。

——君も、私も。

『病氣』というのは、どこまでを指すのだろう。数学の授業中、少し気になって辞書を開く。注意深く読み返してみたりもしたが、あまり納得のいく答えは得られなかった。

例えば、『恋煩い』という言葉がある。わずらい、患い。思い悩んで、心配する事。そして、病氣のことを指す。なるほど、確かに恋をすると、食欲が減る、眠れなくなったり、動悸が激しくなったりする。では、やはり病院に行くべきなのだろうか。うつ病みたいに、ちゃんと薬を服用して、安静にするべき

なのだろうか。でも、きつと大真面目に医師に相談してみても、恋煩いを治す薬なんて、絶対に出てこないだろう。

『愛』なのです。この難病には、確かに『愛の力』こそが、特效薬なのです」

声に出して、その意味を反芻してみた。

では学者様、その『特攻薬』とやらは、何処に行けば貰えるのでしょうか。お金で買うべき物なののでしょうか。実は誰でも、手に入る物だったりするのですか。

もしかして、毎朝この机に置かれる白い花のことだったりしませんか。それとも実は、もう私を見ることも叶わない、このクラスの誰かが隠し持っていたりとか――。

そこでなんだか馬鹿らしくなって、乱暴に辞書を閉じた。

科学の進歩した現代で、医療技術は日々進化を遂げている。随分前に発見された人を消す奇病は、ようやく世間の理解を得るようになってきた。私の友達も犠牲になったとある制度は、ちゃんと少しずつ形を変えて、いまは誰かの救いとなっているだろう。しかし、その偉大な一歩を以てしても、病気の範囲は、

異常と正常の境界は、未だに定義するのは難しい。教室を見渡してみる。本当にいろいろな奴がいると気付かされる。

前の席、先生をじつと見つめるあの子は、病気ののだろうか。

壁際の席で、うわさ話に興じるあいつらは、正常なのだろうか。

彼女は、彼は、君は、私は。本当は、いったい誰が正常なのだろうか。

それとも表には出ていないだけで、みんなそれぞれ、心の片隅で自分なりの『病』を飼っているのかもしれない。

今日話した病は、遠い海外の伝説なんかじゃない。いまだって気を抜けば、あなたの周りで、誰かが孤独の中に消えてしまうかもしれない。自分だけは大丈夫だなんて、本当に言いきれぬだろうか。

愛情だつて平等じゃない世の中を、私たちは今日も生きている。

全てを癒す、全能の薬の開発が待ち望まれる。

「あいつは病気だ」この言葉が難しい。本来の意味の他に、「病的に他人とずれている」の意図を読み取ることもできるから。他と違ってゐるから、常識的ではないから、病気。では、この多様化した現代

で、その「病気」は何を、誰を示すことになるのだろうか。示すことが出来るのだろうか。ちょっと背が低いから、病気。ちょっと頭がいいから、病気。外国人だから、好きなものが自分たちと違うから、生き方が違うから、病気？ もしそれが通じるのであれば、反転すれば自分が病気になる可能性もあると、忘れてはいけないだろう。